
探す旅人

櫻井八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探す旅人

【Nコード】

N4928Y

【作者名】

櫻井八雲

【あらすじ】

命の終わりが解らない世界でフィンは白い鷹のカルセと旅をする。

「俺は探しているんだ。君には到底理解できないものをね」

時には人との交流を拒むような行動をとっても、フィンは旅を続ける。

これから先、フィンは様々な経験を積んでいく。しかし、旅人の探し物は果たしてあるのだろうか。

探し物をする旅人と白い鷹の話が紡がれていく。連載短編小説。

森の雨、闇と旅人

その日は雨が降っていた。

何もない場所に一本道があり、その向こうには森が見えた。

急いで雨から逃れるために森へと駆け込んだ。幸い、降り始めてからさほど時間が経っていないのか、身体は濡れていなかった。服以外は。

森に入った瞬間、まるで雨が止んだかのようにまるっきり降っていなかった。多少上から遮れなかった雨水が下に落ちてきている。

「はあ、びしょ濡れだよ」

まいったなあと、呑気な声が上がった。森は昼間にしては薄暗く、声の主がわからない。

しかし、声の調子からして、少年だということだけは見なくてもわかる。

少年は身体を拭き、木の根元に座ってランプに灯りをつけていると、上空から一羽の鷹が舞い降りてきた。しかし、ごく普通にそこらに生息する鷹ではなく、この世界にしては珍獣とも言えるほど全身が白い。唯一瞳だけが鮮やかな琥珀色をしている。

「あ、いたいた。おーい、フィンー！」

少々低めの青年の様な鷹の声に上を見上げたフィンは、ほんの僅

かだけ嫌そうな顔になった。

「なんだカルセかぁ」

「なんだとはなんだ。私がわざわざ探しに来てやったんだ。お前はそれでなくても単独行動が多いからな。全く、結構苦勞したんだぞ」

「餌を探すのに？ お疲れさま」

「いやー、本当に大変だった。何せ森だから食べ物の一つや二つあると思ってたけど、案外無いもんだ。私はもうお腹ペコペコ……って違う！！ 探してたのはお前だフィン！！」

「俺を？」とフィンは自分に人差し指を向けながら聞き返す。カルセはそれを見て半ば諦めたようにハァーと息をついた。

やや青みが かかった黒髪は肩に届くか届かないかの曖昧な長さ。純白の帽子を被り、瞳は草原の色。森の闇に紛れるような漆黒のコート姿がランプの灯りでほんのり紅く照らされる。

フィンは改めて森の中を見た。物音がないため無音という“音”だけが響き渡る。灯りはランプ以外何一つとしてない。生き物が、人が住むような森ではなかった。

「静かなところだねー。なんで誰もいないんだろう」

「他の土地に移り住んだんじゃないか？ 食べ物もないし動物もない。暗い上に“音がない森”ホラー映画でしかないよ」

「ホラー映画、観たことあるの？」

フィンが聞くと、カルセはニヤリと笑った。

「私は鷹だよ。映画を観たことあると思う？」

「少なくとも、無いという方を躊躇いもなく選ぶことができるね」

「だろ」

互いに苦笑しあう。さてと、とフィンは持っていた荷物から少量の食材を取り出し、カルセに尋ねた。

「夕御飯は何がいい？」

並べてあるのは小麦粉をこねて焼き上げて作った細長いパンとある英国で手に入れた黒砂糖。数種類の果物（木に実るものを示す）があり、カルセは翼でパンを示した。

「このパンをミルクと合わせると美味しいんだよな」

「……………」

フィンは、今はミルクがないから贅沢は出来ない。食べたいなら勝手に食べればいいじゃないかという目をした。

文句を言いかけたが、森の暗さで睡魔が襲いかかる。

「ふわぁ…ねむ……」

「おいおい、まだ夜にもなっていないぞ」

パンを味わいながらカルセは呆れるが、フィンはそのまま横になって目を閉じる。

「俺は眠くなったら寝るのが基本。人間が求めている欲求の一つが今現れているからいいんだ。というわけで。ぐう……………」

と言いながら上着をシーツが替わりに掛ける。

カルセはパンを食べ終わると、寝ているであろうフィンに目を向けた。

「フィン、一つ聞いていいか」

「なんだよカルセ。人がせっかく気持ちよく寝ようとしていたところなのに」

不満の声をフィンはあげる。その中には寝惚けた声も含まれていた。

「まあ、いいから。今から言う質問に答えるだけでいい。お前は旅を止めたいと思ったことはあるか？」

「……あるよ」

少しの間が開いてからフィンは答え、言葉を紡いだ。

「旅を終わらせたいと思ったことは何度もあるよ。命を落としそうになったり、人が死んだり、“死んだ場所”を見たり」

「つまりは命の終わりはもう見たくないってことだな」

カルセは言う。

フィンは無言のまま、何もない答えない。

「ま、人間の終わりなんて醜いものだよ。命だって儂くて小さいけど、私には関係ないからね。フィンと別れたとしても、その時は自由に食材を飛んで探せば良いし。お前は旅を止めてもいい。……でも、フィンが旅を止めないのは理由がある。有能な鷹である私でさえ知りもしない、とても大切な、大切なものを探しているからなんだろう………?」

フィンはもう寝たのか、何も応じない。

鷹はしばらくそれを見つめ、そしてアクビをした。

「あーあ、私も食べたなら眠くなってきた。だから寝るとしよう。鷹にも睡眠という欲求があるからね」

と、カルセはその場で身体を丸くすると、スヤスヤと規則正しい寝息をたて始めた。

一時間後。

既に寝たと思われていたフィンは目を開け、静かに身体を起こして眠っている鷹の方を見た。

「確かに探しているものは、君には理解できないだろうね」

それがどんなにフィンにとって大切なものか。

親に捨てられ大切なものを探すはめになった当時の感情と、ある物を探す理由など。

それを見つけ出すためには、この白い鷹がいなければ成すことが出来ないということを。

「僕は命の終わりなんて見たくない。けれど」

自分は命の本当の終わりであるその場所を探している。

何故そこまでして旅をする必要があるのか、自分でもわからない。

ただ……。

「俺は、どうしても知りたいんだ」

この世界の命の終わりは何処にあり、そこには何があるのか。

どうして、“フィン”がいるのか……。

$\hat{f}_{in}$

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4928y/>

探す旅人

2011年11月17日19時26分発行